

懐疑論とプラグマティズム

横山 幹子*

Skepticism and Pragmatism

Mikiko YOKOYAMA

抄録

主観であるわれわれは、どのようにして、客観である世界についての知識に達することができるのか。それは、哲学に古くからある問いであり、その問いは、懐疑論の源の一つである。そして、懐疑論は、知識の哲学（認識論）における重要な問題である。多くの哲学者がその問題を論じてきた。現代の哲学者であるヒラリー・パトナムやニコラス・レッシャーも、その中に含まれる。彼らは、ともに、プラグマティックな視点から、その問題を解決しようとし、懐疑論に反対して議論している。けれども、彼らの解決策は互いに異なる。この論文では、プラグマティックな視点から反懐疑論を主張するために、彼らの解決策について検討する。そのため、まず、「主観であるわれわれは、どのようにして、客観である世界についての知識に達することができるのか」という問いが懐疑論の一つの源であるという議論がどのようなものをまとめる。次に、パトナムとレッシャーの懐疑論への反論を確認する。それから、彼らの相互批判を確認する。そして、最後に、彼らの考えの問題点について論じたうえで、プラグマティックな視点から反懐疑論を主張するためには、何が重要かを素描する。

Abstract

How can we, as subject, achieve knowledge about the objective world? This is an old question in philosophy and is one of the origins of skepticism. Skepticism has been one of the significant problems in philosophy of knowledge (epistemology), and the topic has been discussed by many philosophers, including contemporary philosophers Hilary Putnam and Nicholas Rescher. Both Putnam and Rescher try to solve the problem from a pragmatic point of view and argue against skepticism. Their solutions, however, are different from each other. This article examines their solutions in order to argue for anti-skepticism from a pragmatic point of view. First, I will organize the argument that the question, 'How can we, as subject, achieve knowledge about the objective world?', is one of the origins of skepticism. Next, I will review the arguments against skepticism presented by Putnam and Rescher, and will review their mutual criticisms. Finally, I will discuss the issues arise in their ideas, and outline what is important to argue for anti-skepticism from a pragmatic point of view.

* 筑波大学図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies University of Tsukuba

1. はじめに

われわれは、日々の生活の中で、何らかの知識¹を求め、また、その知識を利用して生活している。たとえば、つくばエクスプレスを利用する人にとって、「つくばエクスプレスの標準時刻表は、平日と土曜・休日とは異なる」ということは、利用すべき知識であるだろう。また、「平日、17時49分に、つくば発秋葉原行きの快速がある」ということは、その時間帯に東京へ出ようと考えている人にとって、求められるべき知識であるかもしれない。そのように知識を求め、それを利用しようとするために、われわれは書物を読んだり、ウェブのサイトを調べたりもするのである。そして、知識を求め、それを利用しようとする際、われわれは、その知識が正しいのか間違っているかに関心を持っている。つまり、その知識が真であるか偽であるかに関心を持っている。知識を求め、それを利用しようとする人にとっては、その真理²が重要なのである。

しかし、どのような知識が真なのだろうか。それを考えたとき、大きな問題が生じる。もし真理が、人間の思考から独立したものであるなら、自分がどんなに考えても、また、他の人の考えたことをどんなに理解したと思っても、すべてのことに関して、原理的に、われわれは真理に達することができなくなる。もちろん、ここで、真理を何らかの魔法の力で知りうると考えることもできる。けれども、そのように考えないのだとしたら、知識に関する懐疑論³が生じうる。しかし、それを避けるために、真理は、人間が事柄についてどのように考えるかにも依存していると考えたとしても、相対主義的になり、普遍的、客観的に真である知識は、なくなるかもしれない。なぜなら、現実の世界において、われわれが何を正しいと思うか、何を真と考えるかが、時代や人によって変化しているということを、われわれは自覚しているからである。いずれにせよ、われわれは、懐疑論を認めなければならないように思えるのである。

もちろん、ここで、われわれがとることができる道は、いくつもある。われわれは、何らかの権威をもつ魔法の力を想定することもできる。また、われわれは、懐疑論を認め、それを主張することもできる。けれども、権威主義にもならず、懐疑論にもならないような、他の道もあるはずである。そして、そのような道を求めた哲学者の中に、ヒラリー・パトナム⁴やニコラス・レッシュャー⁵がいる。しかし、両者のその問題の解決策は異なり、両者は互いに批判している。

本論文では、上記の問題を考えることを目的としている。その際、次のような順序で論じられる。まず、何が問題であったかを、整理する。次に、その問題に対して、パトナムとレッシュャーが、それぞれ、どのような解決策を考えたかを見る。それから、パトナムのレッシュャーへの批判、レッシュャーのパトナムへの批判を、確認する。そして、最後に、それらを踏まえたうえで、その問題に関してどのように考えるべきかについて論じる。

2. 問題

2.1 何が問題か

主観であるわれわれは、どのようにして、客観である世界についての知識に達することができるのか。人間の思考から離れて真理があるなら、われわれはどのようにして真理に到達できるのか。それは、人々を悩ましてきた問題である。もし真理が人間の思考から離れたものなら、われわれは、思考によっては真理に到達できなくなる。しかし、もし真理がわれわれの考えていることから独立でないなら、それは主観的なものに過ぎなくなる可能性を持ち、相対主義の立場がとられ、客観的に真である知識というものがなくなるかもしれない。いずれにせよ、懐疑論を認めなければならないのである。では、われわれは懐疑論を受け入れるべきなのか。それとも、他の道があるのか。それが、問題である。

2.2 パトナムのその問題の捉え方と解決の方向性

パトナムは、その思索の過程の中で、常に上記の問題を思い描いていたと考えられる。彼の实在論に対する考えの変遷、つまり、形而上学的实在論から内的实在論へ、内的实在論から自然な实在論への変遷は、その問題に対する彼の考察の過程を示している。

初期のパトナムがそうであったような、形而上学的实在論者によれば、世界はわれわれの興味から独立している。パトナムは、『理性・真理・歴史』⁶の中で、次のように言っている。「形而上学的实在論の見地では、世界は心から独立した諸対象のある固定された全体からなっている。『世界がどのようにあるか』についての真なる完全な記述がただ一つ存在する。真理は、語もしくは思惟記号と外的なものやものの集合との間のある種の対応関係を含んでいる。」⁷しかし、そう考えた場合、何らかの魔法の力を想定しなければ、われわれは真理に達することができなくなる。

その困難を克服しようとして、パトナムは、真理は十分によい認識的条件のもとで検証されることであると考

え、内的实在論を主張する。『理性・真理・歴史』から引用するならば、「内在主義者の観点では、『真理』はある種の(理想化された)合理的受容可能性—われわれの信念相互の、そして、その信念と経験、われわれの信念体系の中でそれ自体表現されたものとしての経験との、ある種の理想的整合性であり、心から独立した、もしくは、談話から独立した『事態』との対応ではないのである」。⁸

そのように、パトナムは、何らかの魔法の力を想定して形而上学的实在論の立場を維持することも、検証主義を徹底させ、真理をそのときどきで違ってくるもの、理論や記述に相対的なものとする相対主義的な考えも、選びたくなかった。そして、そのアンチノミーから抜け出すための試みが内的实在論の主張だったのである。

しかし、デューイレクチャー⁹でのパトナムによれば、それも不十分な試みだったのであり、彼は自然な实在論を主張するに至るのである。彼は、次のように言っている。「私の意味での自然な实在論者とは、(正常で『真正な(veridical)』)知覚作用の対象は、『外的な』もの、もっと一般的に言えば、『外的な』实在の相であると考えている人である。」¹⁰

そのような考えは、ウィリアム・ジェームズに見られるような、プラグマティズムの直接实在論の影響を受けたものであった。つまり、そのような問題の解決を考える際に、彼は、プラグマティズムの考え方を使おうとしているのである。1994年にデューイレクチャーが発表される前の1992年に行われたイタリアでのレクチャーは、『プラグマティズム—開かれた問題』¹¹として、1995年に発表されているが、その中で、彼は、「われわれは寛容と複数主義に価値を置くが、その寛容と複数主義と共に来る認識論的懐疑論にわれわれは悩まされている」¹²と言い、その問題を解く鍵が、プラグマティズムであると言っている。

以上のように、パトナムにとっては、「形而上学的な空想に後退することなく、われわれの知識の主張は实在に対して責任を持っているという、われわれの感覚を、正当化することができる道」¹³を求めることが問題だったのであり、その問題を解く鍵がプラグマティズムだったのである。

2.3 レッシャーのその問題の捉え方と解決の方向性

では、レッシャーは、その問題をどのように捉えているのだろうか。「プラグマティックな視点での真理の知識」¹⁴の中で、彼は、上記のような問題を整理するために、以下の三つの主張を考える。

- 1 真理は实在と一致しなければならない。
- 2 それゆえ、真理を決定するためには、われわれは、実際にどのようなものであるか、つまり、实在がどのようなものであるかを決定しなければならない。
- 3 われわれは、自分たちが实在について真であると考えているものから独立に实在に接近する手段を持たない。¹⁵

そして、上記三つを認めるならば、われわれが真理に到達することができないという懐疑論になってしまうと論じるのである。なぜなら、(3)は、自分たちが何を真であるかによってのみ、实在に到達できるということを表しており、(2)は、实在によって以外では真理に到達できないということを表しているからである。

この問題に対して、レッシャーは、真理概念を捨てたり、(1)を捨てたりするのは別の対処の仕方があることを主張する。それは、(2)を変形し、真理と实在の関係を逆にするものである。彼によって変形された(2)は、次のようになる。

- 2' 实在がどのようなものであるかを決定するためには、真理が何であるかを求めなければならない。(正確には、(3)によって。)つまり、实在の決定は真理の判定に付随する。言い換えるならば、認識的な道だけが、われわれが实在にアクセスする方法である。真理を評価するときのみ、われわれは实在するものについての主張を確認することができる。¹⁶

そして、そのやり方を、プラグマティズムは、採用することができるのである。

以上のように、パトナムもレッシャーも同じことが問題であると考えている。そして、両者ともに、そのような問題の解決には、プラグマティズムが重要な役割を果たすとしている。しかし、プラグマティズムを重視するという点が同じでも、両者の解決策は異なるものである。したがって、次に、それぞれの考えるプラグマティズム¹⁷がどのようなものであり、彼らが、それぞれ、どのようにして問題を解決しようとしているかを見てみたい。

3. パトナム

3.1 プラグマティズム

権威主義になることなく、懐疑論にもならず、寛容と

複数主義に価値をおくという可能性を示すプラグマティズムについて、パトナムは、どのように考えているのだろうか。

「プラグマティズムと道徳的客観性」¹⁸の中で、パトナムは、道徳的懐疑論をうち砕き、かつ、権威主義にならない道を探す助けになるのが、アメリカのプラグマティズムだと言ったうえで、重要なのは、その真理の理論のような形而上学的理論ではなく、一群のテーゼであると言っている。そして、彼によれば、それらのものとは、反懐疑論、可謬主義、実在と価値という二分法の否定、および、実践¹⁹が第一であるというものなのである。もちろん、ここで、そのようなプラグマティズムによって反論できるとされているのは、道徳的懐疑論であるが、そのプラグマティズムの主張の中に、事実と価値の二分法の否定が入っているということを考えるならば、それは、認識論的懐疑論にも当てはまるものだと考えて問題はない。つまり、知識一般についてのものだと考えても問題はないということである。

また、『プラグマティズム—開かれた問題』の中で、パトナムは、直接実在論を重視している。その考えによれば、知覚は、外にある対象や出来事についてのものであり、何らかの私的な表象についてのものではない。

上記のプラグマティズムの一群のテーゼと直接実在論という考えに注目することにより、権威主義になることなく、懐疑論にもならず、寛容と複数主義に価値をおくことができるというのが、パトナムの考えなのである。では、このように考えることによって、どのようにして懐疑論を退けることができるのだろうか。次に、その点について見てみたい。

3.2 パトナムの言うプラグマティズムの利点

第二章で確認したように、主観であるわれわれが、客観である世界にどうやって接近するかというという形而上学的問題から、懐疑論が生じる。それに答えるために、パトナムのプラグマティズムは、主観が客観にどうやって接近するかということは問題ではないのだと考える。つまり、先の直接実在論を重視するならば、主観が客観にどうやって接近するかということは問題にはならないのである。われわれは、直接世界を知覚しているのである。

もちろん、そのことは、われわれが手にする知識がすべて真であるということを意味しない。先にも見たように、プラグマティズムは、可謬主義を主張するのである。しかし、ここで、可謬主義こそ、懐疑論に通じるものではないのかという疑問が生じる。われわれが真だと

思っていた知識が後になって偽とわかったという経験は、誰しも持っているだろう。そのような経験があることから、つまり、われわれが間違えることがあるという事実から、今、真だと思っているものもすべて偽かもしれないと論を進める場合がある。そして、それは、懐疑論を導く論証の一つである。

しかし、パトナムの言うプラグマティズムの考え方では、可謬主義は、必ずしも懐疑論と結びつくものではない。プラグマティストは、懐疑論を否定し、同時に、可謬主義を主張できる。可謬主義が主張していることは、疑う理由があるときには任意のものを疑おうという考えであり、すべてのものを原理的に疑うという、普遍的な懐疑論ではない。『プラグマティズム—開かれた問題』の中で彼は次のように言っている。「可謬主義は、疑うための良い理由が生じるなら、任意のものを疑う準備をするように、われわれに要求するだけである。知覚がときどき間違っているという事実は、間違っていない知覚できえ、本当は、『現象』についての知覚に過ぎないということを示してはいない。」²⁰たとえば、その考えによれば、昔は魔女が存在しているということは真だと思われていたが、今はそれが偽だとわかったという経験があるとしても、今、真だと思っているものすべてを偽とする必要はない。われわれは、電気抵抗器が存在しないかもしれないと考える必要はないのである。

もちろん、ここで、どのような知識が真でどのような知識が偽かを示す方法がなければ、可謬主義と反懐疑論が矛盾しないということには、何の説得力もない。しかし、そのような方法についても、パトナムは、『プラグマティズム—開かれた問題』や「プラグマティズムと道徳的客観性」の中で、論じている。彼によれば、「われわれの認識論的問題のすべてを解決するようなアルゴリズムという意味での『方法』は、哲学者の空想である」。²¹しかし、アルゴリズムがないからといって、どのようにして探求を導くかを、まったく知ることができないわけではない。なぜなら、われわれは、今までさまざまなことを探求してきた経験があるからである。プラグマティストによれば、どのような知識が真でどのような知識が偽かは、人間と環境との相互作用を見ることによって示される。「探求は、協力している人間の、環境との相互作用である。」²²

そのように、知識の真偽を示す方法があると考えられるならば、すべてのものを疑うという懐疑論の否定と可謬主義は矛盾するものではなく、われわれが間違える可能性があるということから、懐疑論に至る必要はないのである。

ここで、探求を行うのは、個人ではなく、集団であるということも、重要である。パトナムによれば、探求の際に、他の人間との協力が大切だとされているのである。「孤立した一人の人間が、自分にとって最高の格言を解釈しようとしているときでさえ、その人が、それらの格言を解釈するやり方、もしくは、それらを適用するやり方を、他人が批判することを許さないならば、結果として生じる『確実性』の種類は、常に、致命的に、主観性に汚染されている。」²³ しかし、協力することにより、人間生活の現実の問題としての主観性と客観性の問題を解決することができる。われわれの実践を重視することにより、客観的な知識などありえないという懐疑論を意味のないものにすることができるのである。

ただし、パトナムによれば、協力であれば、どのようなものでもよいというのではない。効果的であるためには、あるべき協力の姿があるのである。たとえば、科学者の間にヒエラルキーがあったり、依存があったりしてはよくないのである。

あるべき協力の姿があるということは、探求が事実についてのものであるとしても、それは、倫理的、道徳的なことと関係しているということの意味している。事実と価値の二分法は、否定されるのである。そのような二分法の否定は、「プラグマティズムと非科学的知識」²⁴の中にも現れている。そこでも、パトナムは、科学が非科学的知識を前提していることを主張しているのである。そして、客観性の問題を形而上学的に考えることを止め、普通われわれが客観性についてどのように考えているかに、つまり、実践に、注目すべきだとしている。彼によれば、「普通、われわれは、風変わりな視点からなされた陳述、もしくは、関係する他の興味や視点に無頓着な人によってなされた陳述を、『主観的』と呼ぶ。一方、その真理の主張が、風変わりな視点や、他人の視点や興味を無視することに依存していないなら、陳述は、『客観的』と呼ばれる。」²⁵そして、実践では、われわれは、そのような意味での、倫理的、道徳的に客観的な陳述があると認めている。われわれは、真なる価値判断があるという考えにコミットしているのであり、客観的な価値判断があると考えているのである。そのようにして、彼によれば、客観性の問題を実践に注目して考察することによって、倫理的、道徳的な知識に関しても客観性が言え、懐疑論を否定することができるのである。

パトナムによれば、実践の優位ということに注目するならば、別のやり方でも、倫理的、道徳的客観性を主張できる。彼は、「プラグマティズムと道徳的客観性」の中で、あるものが実践において必須だということによっ

て、あるものの受け入れを主張する「必須の議論」について述べている。そして、この「必須の議論」によれば、規範的言説は、われわれの生活にとって必須のものであるから、倫理的、道徳的客観性はありうると言うのである。そのように、「必須の議論」からも、懐疑論を否定することができるのである。

以上のように、直接実在論という観点から、主観が客観に達することができないということを根拠にした懐疑論を否定することができる。また、間違いの可能性があるということから、すべてのものが間違いだという結論は出てこないとして、間違いの可能性を根拠にした懐疑論を否定することができる。さらに、実践を重視し、事実と価値の二分法を否定することによって、認識的知識に関しても、倫理的、道徳的知識に関しても、日常生活の現実の問題としては、客観的な知識はないという懐疑論を否定することができる。

4. レッシャー

4.1 方法論的プラグマティズム

二章で見たように、レッシャーは、プラグマティズムを使って、懐疑論の問題を解決しようとする。しかし、彼が考えているプラグマティズムは、真理の意味の修正主義という形でのプラグマティズムではない。言い換えるならば、真理と実在との一致という真理の定義を変えようとするものではない。彼によれば、真理の定義を変えることなく、真理に関するプラグマティズムを主張できるのである。

先の第二章第三節の(1)、(2')、(3)を併せて主張するプラグマティズムが、それである。それは、実在との一致という真理の意味についての古典的な定義を維持したまま、真理の認識に関して、真理と実在との関係を逆にし、そのうえで、合理的で適切な真理を主張するためにはどのようなことが要求されるのかを考えようとする立場である。

しかし、真理と実在との関係を逆にすると、相対主義になり、それが懐疑論につながるのではなかったらうか。そのことを防ぐために、レッシャーは、合理的で適切な真理を主張するためにはどのようなことが要求されるのかを考えることに注目する。そして、そのような彼が提案しているのが、方法論的プラグマティズムなのである。では、その方法論的プラグマティズムとはどのようなものなのだろうか。次に、その点を見てみたい。

方法論的プラグマティズムがどのようなものであるかについては、レッシャーの『方法論的プラグマティズ

ム：知識の理論への体系—理論的アプローチ』²⁶の中で詳しく述べられている。彼によれば、テーゼをプラグマティックに正当化するのではなく、テーゼを検証する方法をプラグマティックに正当化しようという考えが、方法論的プラグマティズムである。その考えの構造を理解するためには、彼が「探求の方法論のプラグマティックな正当化」というタイトルのもとで示している図が役に立つ。その図は、以下のようなものである。

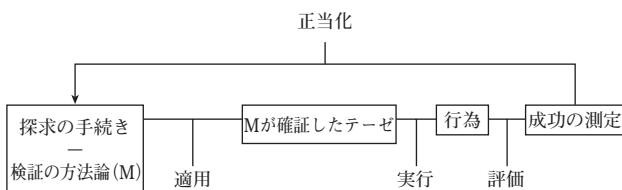


図1 探求の方法論のプラグマティックな正当化²⁷

レッシャーの考えによれば、テーゼをテーゼで正当化すると、その後者のテーゼの正当化も別のテーゼでなされなければならない。後退していく。しかし、テーゼを、それが適切に保証された探求の手続きによって確認されるかどうかを見ることにより、正当化することもできる。彼は、テーゼの正当化のために後者の方法を選ぼうとするのである。

しかし、ここで問題が生じる。その問題とは、探求の手続き、もしくは、検証の方法論をどのようにして正当化するかという問題である。なぜなら、テーゼを正当化するための奇妙な方法もたくさんあるからである。たとえば、アニミズム的なものや数占的なものなどが、そうである。

レッシャーは、その探求の手続き、もしくは、検証の方法論の正当化という問題にこそプラグマティックな側面が関係してくると思う。彼によれば、その方法論によって確認されたテーゼにしたがって行われた行為が、成功していると評価されるなら、その方法論は正当化されるのである。彼は、方法論的プラグマティズムについて次のように言っている。「それは、命題が認識的に保証された規準にあっていなければならないならば、その命題は受け容れられるべきである（つまり、真と見なされる）と主張する。そして、その規準を命題の受け容れのための一般的な原則として採用することが、最大限に成功を約束する（つまり、利益を生み出す）なら、規準は保証されると主張する。」²⁸

4.2 方法論的プラグマティズムの利点

前節で述べたような、方法論的プラグマティズムをとるならば、テーゼのプラグマティズムを採用する場合のように、真理に関する相対主義や、それから生じる懐疑論に陥ることはなくなる。つまり、方法論的プラグマティズムの場合は、テーゼのプラグマティズムのように、同じテーゼの受け入れでも人によって成功するかどうか異なるという問題は生じない。なぜなら、問題となっているのは、方法論だからである。

もちろん、ここで、方法をプラグマティックに正当化するとしたら、たとえば、神託のような手続きも、もしそれがプラグマティックな成功をもたらすならば、正当化された手続きになってしまうのではないかという批判は、考えられる。しかし、レッシャーによれば、プラグマティックに正当化され、成功するならば、どんな方法でもよいというわけではない。彼は、方法論的プラグマティズムを主張する際に、方法に関して、以下の三つの点が重要であると考えている。「(1) われわれは公共的に利用可能な方法（一般的で教えることができる方法）に関係している。(2) われわれは、根拠や展開する議論や証拠などの、内的合理的構造を持つ探求の方法を扱っている。(3) この方法論は、客観的に保証可能なものである。つまり、それ自身の根拠から合理的に自己を維持できるだけでなく、外的な視点（すなわち、プラグマティックな視点）からも正当性が示される。」²⁹方法に関して、そのように捉えたうえで、彼によって主張されているのが、方法論的プラグマティズムなのである。

もちろん、レッシャーによれば、上記のように考えられた方法論的プラグマティズムは、相対主義的な考えから生じる懐疑論を避けることができるだけではない。先に彼によってなされた問題の定式化で、懐疑論を生じさせていたのは、(2)であった。その(2)を主張することを、(2')を主張することによって、彼は、形而上学なことを根拠とした懐疑論をも避けることができるのである。実在との一致という真理の意味についての古典的な定義を維持したまま、真理の認識に関して、真理と実在との関係を逆にし、そのうえで、合理的で適切な真理を主張するためにはどのようなことが要求されるのかを考えようとする立場をとるならば、「主観であるわれわれは、どのようにして、客観である世界についての知識に達することができるのか」、「人間の思考から離れて真理があるのだとしたら、われわれはどのようにして真理に到達できるのか」という問題は解決されるというのが、彼の考えである。

5. レッシャーのパトナムへの批判

レッシャーの方法論的プラグマティズムによれば、テーゼではなく方法に対して、プラグマティックな考察が行われるべきなのであった。そして、彼にとっては、その方法とは、社会的に伝達されることができるという意味で、公共的に利用可能で、かつ、根拠や展開する議論や証拠などの、内的合理的構造を持つものであり、オカルト的にテーゼを確証するようなブラックボックスタイプの方法は、考慮に入れられていなかった。そして、その方法の正当化は、プラグマティックな視点から、つまり、その方法によって確証されたテーゼの結果が成功するかどうかによって、なされるのであった。

それに対して、パトナムは全く異なった方法で考えていると、「プラグマティックな視点での真理の知識」の中で、レッシャーはパトナムを批判している。彼によれば、パトナムは、社会の受け入れ (communal acceptance) を、真理にとって重要なことと考え、科学は探求の民主化を必要としているというのである。

この民主的な態度は、ジレンマをもたらし。そのジレンマとは、社会 (the community) が現実のものであるなら、あまりに多くのものを偶然的な取り決めの曖昧さに任せることになり、社会が理想的なものであるなら、現実の社会からどのようにして理想的な社会に至るのかわからないというものである。

レッシャーによれば、彼の方法論的プラグマティズムでは、その問題はなくなる。公共的に利用可能で、内的合理的構造を持つ方法を対象とし、それを使って確証されたテーゼの適用による効果を考察することで、方法の質を制御できると言うのである。

6. パトナムのレッシャーへの批判

6.1 レッシャーの誤解

パトナムは、「ニコラス・レッシャーの論文へのコメント」³⁰の中で、レッシャーの彼への批判は、的はずれなものであると主張している。

パトナムによれば、彼自身、効果的な適用と予言 (prediction) を強調している。そして、合理的な信念確定のために本質的なことは、環境との相互作用であるとし、高く確証されている仮説でさえ、場合によっては偽としようとしているのだというのである。しかし、彼によれば、それだけでは十分ではない。彼は、次のように言っている。「パースやデューイや私自身のようなプラ

グマティストは、また、仮説を効果的に生み出すためにも、良いテストをつくるためにも、どんな場合にテストの結果が仮説の受け入れを保証するのかを決めるためにも、実際、能力のある研究者の諸集団 (communities of competent inquirers) が、必要であると論じている」³¹

レッシャーはこのことを、公共の受け入れが、効果的な適用と予言に反対するものとして、重要視されていると理解している。しかし、実際に「プラグマティズムと道徳的客観性」の中で言っているのは、探求の際には、環境を積極的に操作することと、他の人間との協力の二つのことが、共に、重要であるということである。そのうえ、協力が肝要だということと、公共の受け入れが肝要だということは意味が違う。パトナムは、そう主張するのである。

6.2 方法論的プラグマティズム批判

パトナムによれば、レッシャーは、パトナムの考えを誤解し、批判したうえで、異なるプラグマティズムを提案している。

成功した予言や適用の際の効果を生み出す傾向によって正当化されるのは、方法であり、これらの方法を使うことによって、個々のテーゼが受け入れられたり拒絶されたりする。それが、先に見たように、レッシャーの言う方法論的プラグマティズムである。

パトナムは、この考えが、「プラグマティズムと道徳的客観性」の中で、自分が批判している考えであると言うのである。彼によれば、方法は、アルゴリズムのようなものではありえず、それ自体、文脈的解釈を要求する。そこで、協力ということを考えないならば、つまり、一人の人が孤立して解釈し、他人の批判を許さないならば、その結果として生じるものは、主観性を免れることができない。にもかかわらず、レッシャーは、保証された真理評価を記述するために社会に言及する必要がないと考えている。それは、間違っているのである。

そのうえ、パトナムによれば、成功した予言や適用だけでは、不十分である。³²なぜなら、われわれは、何らかの方法論的規範を必要とするからである。われわれは、予言や適用が成功しているかどうかで理論をテストするとしても、その前に、どの理論をテストするかを選ばなければならない。また、予言や適用に関して、同じように成功している理論間のどれを選ぶかは、成功した予言や適用ということでは、答えることができない。たとえば、単純性や一貫性のような規範が考えられなければならない。成功した予言や適用では、答えることができない問題があるのである。

「プラグマティズムと道徳的客観性」の中で、彼は、次のように論じている。「設立された利便性を最大にするように行なさい」³³の正当化は、完全には道具的、言い換えるなら、プラグマティックではない。確かに、「ある一つの状況において、私が、二つの行為のうち一つをしなければならぬ場合がある。そして、それらの行為の一つは私に巨大な利益を与える可能性が高く、もう一つは私に巨大な損害を与える可能性が高い。このような場合、もちろん、規則は、私に、巨大な利益を与える可能性が高い行為をなすよう、指示する」。³⁴けれども、問題になっているのが、たとえば、ただ一度しか行われな「かけ」だとしたら、たとえ長い目で見た場合の成功がわかっているとしても、行為を正当化することはできない。ここで、無限に長い目で見て合理的人間全員に利益を与えるように振るまえても、解決にならない。彼によれば、自分が直面しているのが拷問であるとき、誰も合理的人間全員の利益など考えない。そのように、われわれは、プラグマティックな正当化では十分ではない規範の拘束を認めなければならない。それが、彼の考えなのである。

そのうえで、これらの方法論的規範が主観的なものになるのを防ぐためには、能力のある探求者が、特定の文脈で、それらを解釈し適用する際に、統一的な見解がなければならない。そのような意味で、協力的実践が必要なのである。それは、社会の受け入れが理論の真理のための規準であるということではない。もちろん、レッシュャーは、理論ではなく方法を、成功した予言や適用で正当化しようとしている。しかし、それでもうまくいかない。なぜなら、方法は、解釈を要求し、成功した解釈は、能力のある探求者の集団によって与えられるからである。パトナムは、そう主張するのである。

7. 考察

ここまで、どのようにして知識についての懐疑論が生じるか、その懐疑論を避けるためにどのような提案がなされていたか、その提案に対してどのような批判がなされているかを見てきた。具体的には、「主観であるわれわれは、どのようにして、客観である世界についての知識に達することができるのか」、「人間の思考から離れて真理があるのだとしたら、われわれはどのようにして真理に到達できるのか」ということから、懐疑論的ジレンマが生じることを確認し、そのような懐疑論を避けるために、プラグマティズムの立場から提出された解決策として、パトナムとレッシュャーの解決策を概観した。そし

て、それから、パトナムとレッシュャーが、互いの考えに対してどのような批判をしているのかを見た。

私は、パトナムやレッシュャーの懐疑論的ジレンマに対する解決策は、プラグマティズムの立場を前提とすれば、かなり説得力のあるものだと考える。そこで、本章では、まず、プラグマティズムの立場での最低限の前提を確認したうえで、パトナムやレッシュャーの解決策が、なぜプラグマティズムという前提のもとで説得力あるものと考えられるかについて論じる。しかし、私は、同時に、彼らの解決策は、全く問題のないものではないと考える。それゆえ、次に、彼らの相互批判も参考に、それぞれの解決策のどこが問題であるかを指摘する。そして、それらをふまえたうえで、最後に、プラグマティズムの立場を前提とした反懐疑論の主張は、どのようなものであるべきかを提案する。

そのためには、まず、パトナムの解決策とレッシュャーの解決策の重要な類似点と相違点を確認することが、役に立つ。それゆえ、まず、類似点について見てみたい。

第一の類似点は、両者が、具体的な批判をする際に、実践に重きを置いているということである。

第二の類似点は、「人間の思考から離れて真理があるのだとしたら、われわれはどのようにして真理に到達できるのか」ということから生じる懐疑論的ジレンマに対して、両者が、基本的には、「真理を人間の思考から離れたものだ」と考えて、その結果生じる懐疑論を批判しているのではなく、「真理は人間の思考から独立ではない」と考えて、その結果生じる懐疑論を批判しているという点である。

パトナムは、「真理は人間の思考から離れたものだ」と考えることは間違っていると考えている。なぜなら、彼は、直接実在論を重視するからである。彼によれば、われわれが、何らかの媒介物を通して、間接的に外にあるものを知覚しているという考えを捨て、われわれが、外にあるものを直接知覚していると考えれば、真理は人間の思考から離れていないのである。しかし、彼は、「真理は人間の思考から独立ではない」とか考えたとしても、懐疑論にはならないと主張する。確かに、われわれが手にする知識がすべて真であるわけではないが、われわれが間違える可能性があるという可謬主義を主張するからといって、それは、反懐疑論と矛盾するものではないのである。そのうえ、さらに、効果的な適用と予言と、探求する人間の協力ということを主張することにより、われわれは、客観的に真である知識を手に入れることができるのである。

同様のことは、レッシュャーにも見られる。彼は、実在

との一致という真理の意味についての古典的な定義を維持したまま、真理の認識に関して、真理と実在との関係を逆にし、そのうえで、合理的で適切な真理を主張するためにはどのようなことが要求されるのかを考えようとする。このように真理と実在の関係を逆にするということは、「真理は人間の思考から独立ではない」という立場をとることである。そして、そのうえで、合理的で適切な真理を主張するためにはどのようなことが要求されるのかを考えることは、「真理は人間の思考から独立ではない」という立場を認めたとうえで、懐疑論にならない道を探ることである。そして、その具体的な方法が、彼の場合は、方法論的プラグマティズムだったのである。

第三の類似点は、何らかのやり方で効果的な予言と適用という視点を使用することにより、何が真理であるか、言い換えるならば、真なる知識であるかについて何らかのことを言えると考えている点である。たとえば、パトナムがレッシェンによって誤解されているとしても、パトナムが効果的な予言や適用を重視していたことには間違いはない。

では、重要な相違点は何だろうか。

レッシェンは、テーゼに対してではなく、探求の方法に対して、プラグマティックな正当化を当てはめる。しかし、彼の言う方法には、オカルト的にテーゼを確証するようなブラックボックスタイプのものは、含まれない。なぜならば、それは、彼によれば、一般性と公共性を欠いているからである。彼の言う方法とは、一般的で人に教えることができるという意味で、公共的に利用可能なものであり、根拠や展開する議論や証拠などの、内的合理的構造を持っているものなのである。そして、そのような特徴を備えた方法が、効果的な予言と適用によって、プラグマティックに正当化されるのである。もちろん、方法は、人間間で共有されなければならないものであるが、その際、その方法が、社会でどのように受け取られているかは、問題ではないのである。

それに対して、パトナムは、そのような探求の方法はありえないと考える。彼によれば、方法は、コンピュータプログラムのようなアルゴリズムというモデルで理解されるものではないのである。したがって、その方法の正当性は、合理的な一人の人によってはかられるものではない。それは、文脈的に解釈されなければならない、主観性に陥らないためには、人間の協力が必要なのである。

そのうえで、パトナムによれば、何が真なる知識で何が偽なる知識かを言う際に、効果的な予言や適用だけでは不十分である。なぜなら、われわれは何らかの方法論的

規範を必要とするからである。そして、その中には、成功した予言や適用では、答えることができない問題があるのであり、そのような規範の正当化には、やはり、人間の協力が必要なのである。

では、以上の考察から見てとれる、プラグマティズムの立場での最低限の前提は何なのだろうか。それは、少なくとも、両者の類似点に属するものでなければならない。そして、私は、両者の類似点の中でも、もっとも基礎的に思えるものが、最低限の前提であると考えている。それゆえ、私は、実践の重視が、どのプラグマティズムにも共通の、重要な要素だと考えるのである。おそらく、このことには、異論はないだろう。だとすれば、もし、プラグマティズムの考えを使って、何らかの問題を解決しようとするなら、われわれは、実践を重視せざるをえないのである。そして、われわれが実践を重視することは、われわれが実際にどのようにしているかを重視することにつながる。したがって、以下では、パトナムやレッシェンの解決策が、実践の重視という前提のもとで説得力あるものと考えられるかについて論じる。

このことに関しても、両者の類似点を見てみることで明らかになる。

まず注目すべき類似点は、「真理を人間の思考から離れたものだ」と考えて、その結果生じる懐疑論を批判するのではなく、「真理は人間の思考から独立ではない」と考えて、その結果生じる懐疑論を批判しているという点である。私は、その考えも、先の実践の重視という視点からは、適切であると思う。なぜなら、パトナムが言っていたように、真理が人間の思考から離れているなら、われわれは、魔法の力でも想定しないかぎり、真理に到達することができないからである。けれども、われわれは、自分たちが真なる知識を手に入れることができないとは考えない。時刻表を見て、列車の時刻を調べ、「平日、17時49分に、つくば発秋葉原行きの快速がある」という知識を得ようとするのは、自分たちが真なる知識を手に入れることができると考えているからなのである。つまり、実践の重視という立場からは、「真理は人間の思考から離れたものだ」ということから生じる懐疑論は問題にならないと論じられるのである。その点で、パトナムやレッシェンの解決策は、実践の重視という前提のもとで説得力あるものと考えられるのである。

もう一つは、効果的な予言と適用という視点である。われわれは、日常、何らかのことを効果的に予言したり、それを適用することによって効果が得られたりするものを、真だと考えている。たとえば、平日、17時49分に間に合うように、つくば駅に行き、秋葉原行きの快

速に乗れたなら、「平日、17時49分に、つくば発秋葉原行きの快速がある」は、真なる知識だと考えるだろう。テーゼではなく方法を考え、適切なサイトに接続したから、効果が得られたのだと考えても、同様のことが言える。それゆえ、知識が真であるかどうかを考える際に、効果的な予言と適用を重視するということは、実践の重視という視点に合っている。したがって、効果的な予言と適用という視点で、適切な真理を主張するためにはどのようなことが要求されるのかを考えることによる懐疑論批判は、プラグマティズムの前提のもとでの懐疑論批判として、説得力のあるものと考えられるのである。

そのうえ、パトナムの可謬主義と反懐疑論が矛盾しないという主張も、実践の重視という立場からは、適切に思える。したがって、そのような主張による懐疑論批判も、プラグマティズムを前提とするなら、説得力あるものに思えるのである。

私は、以上が、パトナムとレッシュャーの懐疑論的ジレンマに対する解決策が、なぜプラグマティズムという前提のもとで説得力あるものと考えられるかの理由であると考え。

では、両者の考えの問題点はどのようなものだろうか。それを考える際には、両者の相違点に注目することが役に立つ。

レッシュャーは、パトナムとは異なり、テーゼではなく、探求の方法を、効果的な予言と適用によって、プラグマティックに正当化しようとしていた。そして、彼の言う方法とは、一般的で人に教えることができるという意味で、公共的に利用可能なものであり、根拠や展開する議論や証拠などの、内的合理的構造を持っているものだった。そうすることにより、真理が人間の思考から独立ではないとしても、客観的な知識に到達することができるのであった。しかし、私は、このような彼の解決策には、問題点があると考え。それは、「一般的で人に教えることができるという意味で、公共的に利用可能なものであり、根拠や展開する議論や証拠などの、内的合理的構造を持っているもの」だけを方法と見なしている点である。パトナムも、それを、アルゴリズム的なものだけが方法なのではないと批判していた。しかし、ここでの問題は、アルゴリズム的なものだけを方法と考えているということではない。そうではなく、効果的な予言や適用というプラグマティックな正当化を離れたところで、「方法」概念に何らかの制約を付けているところが問題なのである。レッシュャーも認めているように、もし、効果的な予言や適用というプラグマティックな正当化だけが問題だとしたら、ブラックボックスタイプの方

法も、たとえば、神託もよい結果をもたらすかもしれない。「一般的で人に教えることができるという意味で、公共的に利用可能なものであり、根拠や展開する議論や証拠などの、内的合理的構造を持っているものだけが方法である」ということは、方法論的プラグマティズムの図式の中では、示すことができないのである。

パトナムは、そのようなレッシュャーの問題点に気づいている。だからこそ、彼は、プラグマティックな正当化では十分ではない規範があるということを主張しているのである。けれども、だからといって、彼の解決策に問題がないわけではない。パトナムの図式で、懐疑論を批判するなら、プラグマティックな正当化では十分ではない規範を、どのようにして、真なるものとして主張するのかという問題が残っている。もちろん、パトナムは、その問題に対して、人々の協力が必要だと述べている。けれども、それだけでは、解決にならない。なぜなら、人々の協力は、社会の受け入れとは別のものだと考えられているからである。もし、人々の協力が、社会の受け入れであるなら、プラグマティックな正当化では十分ではない規範でも、社会の受け入れによって、真なる知識とされるかもしれない。しかし、そうでないとしたら、人々の協力で、どのようなことを意味しているのかが、詳しく、具体的に、説明されなければならない。そのうえ、もし協力すべき人が、懸案となっているものに関して、特別に選ばれた能力を持っていないとすればならぬとしたら、なお状況は難しくなる。特別に選ばれた能力を持っていることをどのようにして決めるのか。いずれにせよ、パトナムの考えにも問題があるのである。

では、パトナムやレッシュャーの解決策の問題点を踏まえ、プラグマティズムの立場を前提とした反懐疑論の主張はどのようなものであるべきなのだろうか。私は、そのためには、パトナムの言うように、プラグマティックな正当化では十分ではない規範を認めなければならないと考える。レッシュャーの論からも見てとれるように、いずれにせよ、われわれは、どこかで、何らかの議論の前提に突き当たらざるをえないのである。だとしたら、そのようなものを認めることから始めなければならない。もちろん、その際、その前提が何であるかが明らかにされなければならない。そのために、人々の協力を注目しなければならないということも、認めざるをえないだろう。けれども、人々の協力ということに関しては、もっと詳しく論じられなければならない。そして、そのとき、抽象的に論じられたのでは、後退に陥る。被説明項が説明項によって説明されたとしても、後者はまた、新たな被説明項となり、説明されなければならない

い。したがって、人々の協力にかんして、もっと具体的に論じられることが必要であるだろう。個々の具体的な事例の分析を積み重ねることによって、人々の協力によって、どのようにして、真なる知識が得られるかの事例が積み重なり、そうすることによって、われわれは何も知ることができないという懐疑論に反論することができるのである。そして、そのことが、プラグマティズムの立場を前提とした反懐疑論の主張に求められるべきことであると、私は考えるのである。

8. おわりに

本論文では、「主観であるわれわれは、どのようにして、客観である世界についての知識に達することができるのか」、「人間の思考から離れて真理があるのだとしたら、われわれはどのようにして真理に到達できるのか」ということから生じる懐疑論的ジレンマについて考察してきた。その際、まず、そのような問題がどのようにして生じるのかを確認し、それを避けるために、プラグマティズムの立場から提出された解決策として、パトナムの解決策とレッシャーの解決策を概観した。そして、それから、パトナムとレッシャーが互いの考えに対してどのような批判をしているのかを見た。そして、最後に、プラグマティズムの立場での最低限の前提を確認したうえで、パトナムやレッシャーの解決策が、なぜプラグマティズムという前提のもとで説得力あるものと考えられるかについて論じ、同時に、それぞれの解決策のどこが問題であるかも指摘した。そして、それらをふまえたうえで、最後に、プラグマティズムの立場を前提とした反懐疑論の主張は、どのようなものであるべきかを提案した。ただし、ここで論じられていることは、プラグマティズムの立場を前提とした場合の反懐疑論の主張にすぎない。プラグマティズムの立場を前提とすべきかどうかについては、別の場所で論じられなければならない。

注

(1) 哲学においては、「知識」という語を「正当化された真なる信念」という意味で使うことが一般的である。しかし、日本語の日常においては、「正しい知識」、「間違った知識」という言い方は、普通に使われる。それゆえ、本論文では、「知識」という語を、「正当化された真なる信念」より広い意味で、使用する。ただし、引用や引用の説明の際に、ここで言う「知識」と似た意味で「信念」という語が使われ

ることもある。

- (2) 「真理」という語は、倫理的もしくは宗教的正しさを言うためにも使われる。また、「真なる」という形容詞は、命題だけでなく、事物や概念にも使われる。しかし、ここでは、「真理」という語を命題の正しさという意味で使う。
- (3) 懐疑論をめぐるっては、さまざまな意見がある。しかし、本論文では、議論のテーマを絞るために、「懐疑論」を「客観的に真である知識に到達することは、すべてのものに関して、原理的にできない」という議論に限定して、論じる。
- (4) パトナムは、心の哲学、科学哲学、言語哲学を主な関心領域とするアメリカの哲学者。
- (5) レッシャーは、ピッツバーク大学の哲学の教授。そこで、長年、科学哲学のセンター長を勤めた。哲学の多くのエリアに関して多くの著作がある。
- (6) Putnam, H. Reason, Truth and History. Cambridge, Cambridge University Press, 1981.
- (7) Ibid. p. 49. 拙訳。以下の引用の翻訳に関しても同様。
- (8) Ibid. p. 49-50. 斜字体原著者。以下、ことわらない場合は同様。
- (9) デューイレクチャーは、1994年3月22・24・29日に、コロンビア大学でパトナムが行った講演であり、そのときの内容が以下のThe Journal of Philosophy にデューイレクチャーとして収録されている。Putnam, H. The Dewey Lectures 1994: Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind. The Journal of Philosophy. vol. XCI, no. 9, 1994, p. 445-517. また、それはさらに、多少の変更を経て、Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". The Threefold Cord: Mind, Body, and World. New York, Columbia University Press, 1999, p. 1-70. に再録されている。以下で引用する際は、後者を使用する。
- (10) Ibid. p. 10.
- (11) Putnam, H. Pragmatism: an Open Question. Oxford, Basil Blackwell, 1995.
- (12) Ibid. p. 2.
- (13) Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". p. 4.
- (14) Rescher, N. "Knowledge of the Truth in Pragmatic Perspective". Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 66-79.

- (15) Ibid. p. 70.
- (16) Ibid. p. 70.
- (17) 「プラグマティズム」は、19世紀後半から20世紀、アメリカを中心に発展した思想で、「現実の生における具体的な行為の中で精神活動が果たす役割を見る視点に重心をおいて、そこから科学論・道徳観・存在論を改変し直そうという思想である」。(廣松涉他編. 岩波哲学・思想大辞典. 東京, 岩波書店, 1998, p. 1395.)
- (18) Putnam, H. “Pragmatism and Moral Objectivity”. *Word and Life*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994, p. 151-181.
- (19) ここでの「実践」という語は、プラグマティズムの流れの中で使われていると考えられる。プラグマティズムの代表者であるパースは、カントの「プラグマターティッシュ」に着目している。(伊藤邦武. パースのプラグマティズム. 東京, 勁草書房, 1985. 参照。) 本論文でも、そのような流れの中で、「実践」という語を使う。
- (20) Putnam, H. Pragmatism: an Open Question. p. 21.
- (21) Ibid. p. 69.
- (22) Putnam, H. “Pragmatism and Moral Objectivity”. p. 171.
- (23) Ibid. p. 172.
- (24) Putnam, H. “Pragmatism and Nonscientific Knowledge”. Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 14-24.
- (25) Ibid. p. 17.
- (26) Rescher, N. *Methodological Pragmatism: a Systemic Approach to the Theory of Knowledge*. Oxford, Basil Blackwell, 1977.
- (27) Ibid. p. 66.
- (28) Ibid. p. 71-72.
- (29) Ibid. p. 76.
- (30) Putnam, H. “Comment on Nicholas Rescher’s Paper”. Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 80-85.
- (31) Ibid. p. 81.
- (32) その点に関しては、Putnam, H. “The Diversity of the Sciences”. *Word and Life*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994, p. 463-480. も参照。
- (33) Putnam, H. “Pragmatism and Moral Objectivity” .

p. 161.

(34) Ibid. p. 161.

参考文献

- Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. *Hilary Putnam: Pragmatism and Realism*. London & New York, Routledge, 2002.
- 廣松涉他編. 岩波哲学・思想大辞典. 東京, 岩波書店, 1998.
- 伊藤邦武. *パースのプラグマティズム*. 東京, 勁草書房, 1985.
- Putnam, H. *Reason, Truth and History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981. (Putnam, H. (野本和幸, 中川大, 三上勝生, 金子洋之訳) *理性・真理・歴史：内的実在論の展開*. 東京, 法政大学出版局, 1994.)
- Putnam, H. *Word and Life*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994.
- Putnam, H. “Pragmatism and Moral Objectivity”. *Word and Life*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994, p. 151-181.
- Putnam, H. “The Diversity of the Sciences”. *Word and Life*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994, p. 463-480.
- Putnam, H. *THE DEWEY LECTURES 1994: Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind*. *The Journal of Philosophy*. vol. XCI, no. 9, 1994, p. 445-517.
- Putnam, H. *Pragmatism: an Open Question*. Oxford, Basil Blackwell, 1995.
- Putnam, H. *The threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999. (Putnam, H. (野本和幸監訳) *心・身体・世界：三つの撚り糸／自然な実在論*. 東京, 法政大学出版局, 2005.)
- Putnam, H. “Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind”. *The threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 1-70.
- Putnam, H. “Pragmatism and Nonscientific Knowledge”. Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 14-24.
- Putnam, H. “Comment on Nicholas Rescher’s Paper” .

Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J. ; Zeglen, U. M. , ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 80-85.

Rescher, N. Methodological Pragmatism: a Systems-theoretic Approach to the Theory of Knowledge. Oxford, Basil Blackwell, 1977.

Rescher, N. “ Knowledge of the Truth in Pragmatic

Perspective” . Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J. ; Zeglen, U. M. , ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 66-79.

(平成 18 年 9 月 29 日受付)

(平成 18 年 12 月 21 日採録)